

お茶うけ 第17話

三橋節子の心

以前紹介した滋賀の伝説「余呉の天女」の絵を絶筆として、1975年2月に画家三橋節子は亡くなりました。転移性肺腫瘍で35歳の若さでした。三橋節子は京都に生まれ、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)に学び、結婚後は滋賀県大津市に住んで、画家、妻、母として充実した生活を営んでおりました。早くから新進の画家として将来を期待されましたが、鎖骨腫瘍を患い33歳のときに利き腕の右腕切断という、画家として致命的な打撃を受けました。

しかし、懸命の努力でその苦境を乗り越え、それから左手で、主に琵琶湖にまつわる伝説に主題を求めて作品を書き続けました。それらは、「田鶴来」、「三井の晩鐘」、「花折峠」、「雷獣」であり「余呉の天女」でありました。

1986年8月、滋賀県立近代美術館の「三橋節子回顧展」に行き、約100点もの作品を観ると共に、梅原猛の「三橋節子の芸術と人生」の講演を聞きました。講演は、最愛の子供たちを残して去らなければならない画家三橋節子の悲しみと、彼女が子供たちに残したメッセージとも言える作品に付いての、心のかもったものでした。(梅原猛:京都市立芸大教授、学長を経て、国際日本文化研究センター初代所長、現顧問。著書『湖の伝説』新潮社刊に、三橋節子の生涯を感動的に書いています)



例えば、「三井の晩鐘」は乳飲み子のために自分の2つの目を与えた母蛇のお話です。

昔、今の津市滋賀里のあたりに、一人の若者がいました。若者は琵琶湖で漁をして、暮らしていましたが、貧しく独り者でした。ある日、浜辺で村の子供たちが小さな蛇を苛めているのを見て、可哀相に思い金をやって助けてやりました。

その夜更けに、表の戸を叩く音がするので開けると、一人の娘が立っていました。その日から、娘は若者の家に居ついて、身の回りの世話をしたり、掃除をしたりせせと働き出しました。こうして、二人は結婚し、そのうちに嫁となった娘は子供を宿しました。出産の時に心配のあまり、絶対に見ないという約束を破って、産屋(うぶや)を覗いた若者が見たのは、それは大きな大蛇の姿でした。

実は、若者が助けた蛇が、娘に姿を変えて恩返しにきたのでした。蛇の姿を見られた嫁は、湖に帰りますが、子供のために大きな玉を残します。この玉を嘗めることによって、子供はすくすくと育ちました。ところが、不思議な玉の噂が、お殿様の耳に入って、役人が無理やり取り上げてしまいました。

若者は困って、子供を抱いて湖岸に行き、湖の中の嫁に一部始終を伝えました。嫁は「もう一つ玉があります。それを差し上げましょう」と渡しました。「しかし、私はこれから昼と夜の区別がつきません。どうぞ朝と晩に三井寺の鐘を撞いて下さい。その鐘の音で、朝を知り夜を迎え、同時に子供の無事を知ることになります」。大きな玉は、母蛇の目の玉だったので。母蛇は自らが盲目になっても、子供のために二つの玉を与えたのでした。

今でも、毎日夕暮れに三井寺の鐘の音が琵琶湖の湖面に響きます。湖底の母蛇は聞いているのでしょうか。

(『近江の伝説』駒敏郎、中川正文著 角川書店刊 P-167~174より)

思えば、「余呉の天女」も子供を残して去りました。

三橋節子が、左手に絵筆を持ち替えてから、琵琶湖にまつわる伝説の絵を書き続けたのは、残していく自分の子供たちへの思いを伝説に託したのではないかと思います。しかも、三橋節子は亡くなる前年の11月に、家族で余呉湖に一泊旅行をしています。彼女の絵に描かれている母なる人物や子供たちの目に、何か一途な光を見るような気がしてなりません。

以上